



英語・小論文

試験科目	ページ	解答用紙枚数	時間
英語 〔コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・ 英語表現Ⅰ・英語表現Ⅱ〕 から1科目	1~4	2枚	70分
小論文	5~10	1枚	90分

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけない。
2. この問題冊子は10ページある。印刷不鮮明の箇所などがある場合には監督者に申し出ること。
3. あらかじめ届け出た試験科目(英語、小論文の内の1科目)を解答すること。
4. 解答はすべて別紙の解答用紙に記入すること。
5. 解答用紙の指定欄には必ず受験番号を記入すること。
6. 解答用紙の評点欄には何も記入しないこと。
7. 英語の解答用紙の右下にある破線枠内には何も記入しないこと。
8. 解答用紙は持ち帰らないこと。

英 語

I 次の英文を読み、下の設問(1)～(6)に日本語で答えなさい。

There is no one accepted definition of culture in either psychology or anthropology¹. What is important, however, is that we have a working² definition of culture for our own use. In this essay, therefore, we define human culture as *a unique meaning and information system, shared by a group and passed on across generations, that allows the group to meet basic needs of survival, pursue happiness, and derive meaning from life.*

Of course, human cultures exist first to enable us to meet basic needs of survival. Human cultures help us to meet others, to produce children, to put food on the table, to provide shelter from the elements³, and to care for our daily biological needs.

But human culture is so much more than that. It allows for⁴ complex social networks and relationships. It allows us to enhance⁵ the meaning of normal, daily activities. It allows us to pursue happiness. It allows us to be creative in music, art, and drama. It allows us to seek recreation and to engage in sports and organize competition, whether in the local community Little League or the Olympic Games. It allows us to search the sea and space. It allows us to create mathematics, an achievement no other species can claim, as well as an educational system. It allows us to go to the moon, to create a research laboratory on Antarctica⁶, and send probes⁷ to planets. Unfortunately, it also allows us to have wars, create weapons of mass destruction, and create terrorists.

Human culture does all this by creating and maintaining complex social systems, improving cultural practices, creating beliefs about the world, and communicating the meaning system to other humans and future generations.

It is the product of the evolution of the human mind, increased brain size, and complex cognitive⁸ abilities, in response to the specific ecologies⁹ in which groups live and the resources available to them to live. People live in groups, and groups create cultures to help us meet our needs. Culture results from the interaction among universal biological needs and functions, universal social problems created to deal with those needs, and the context in which people live. Culture is a solution to the problem of individuals' adaptations to their contexts to cope with their social motives and biological needs.

【Adapted from David Matsumoto and Linda Juang (2013), *Culture and Psychology*, 5th edition】

- [注]
- 1. anthropology : 人類学
 - 2. working : 役立つ, 仕事を推進するための
 - 3. elements : (風, 雨, 寒さなどの)自然力, 風雨, 悪天候
 - 4. allow for : を可能にする
 - 5. enhance : 充実させる, 豊かにする, 拡充する
 - 6. Antarctica : 南極大陸
 - 7. probe : 宇宙探査機
 - 8. cognitive : 認知的な
 - 9. ecology : 生態環境

[設問]

- (1) 筆者は人間の文化をどのように定義していますか。
- (2) 私たちが生存のための基本的なニーズを満たすのを可能にするために, 人間の文化は存在すると述べられています。それに関連して, 具体的には, 人間の文化は私たちが何をすることに役立ちますか。
- (3) 下線部(a)を日本語にしなさい。
- (4) 否定的な側面として, 人間の文化は私たちが何をすることを可能にしますか。
- (5) 人間の文化とは何の産物であると述べられていますか。
- (6) 文化とは何に対する解決策であると書かれていますか。

II 次の(1)~(5)の空所()に最も適当な英語の単語(1語)を入れて、対話の意味が通じるようにしなさい。

- (1) A: Which European country do you like better, Spain or Norway?
B: I prefer Spain. The climate of Spain is milder than () of Norway.
- (2) A: May I speak to Mr. Sato?
B: Please wait. He is () another line now.
- (3) A: I love the song by Nancy Williams.
B: Me too. She is by () the best singer in my country.
- (4) A: Do you know that a big fire broke out downtown yesterday morning?
B: To () matters worse, a strong thunderstorm hit the area last night.
- (5) A: This wonderful summer will end soon.
B: Yes. These leaves will () turned red by next month.

III 次の(1)~(5)が正しい英文になるように、それぞれの()の中の語句を並べかえなさい。解答用紙には()内のみ記入すること。

(1) It (last Friday, that, not, I, until, was) heard the surprising news.

(2) I've (invite, about, who, thinking, to, been) to the party.

(3) I (shouting, she, her, stand, when, can't) gets angry.

(4) This box is (as, times, heavy, three, as, that) one.

(5) The teacher (by, on, sat, the, surrounded, floor) his students.

IV 次の 2 つの英語の質問から 1 つを選び、解答用紙の()に選択した質問の番号を記入のうえ、100 語程度の英語で自分の考えを書きなさい。(How are you? は 3 語と数えます。)

(1) What can you do to make your hometown more attractive?

(2) What can you learn from talking with visitors from foreign countries?

小論文

以下の資料は、広井良典『科学と資本主義の未来：くせめぎ合いの時代』を超えて』(東洋経済新報社、2023年)からの抜粋である。これを読んで、次の設問すべてに答えなさい。

問Ⅰ 資料を600字以内で要約しなさい。

問Ⅱ 個人の幸福を実現するためにどのような公共政策が必要であると考えますか。あなた自身の経験や身近な人たちから見聞きしたことから一つを事例として選び、その内容と理由について600字で具体的に述べなさい。

解答は、解答用紙の指定された箇所に記入すること。解答にあたっては、解答用紙の1マスを1字に使い、句読点、引用符、カッコなどはいずれも1字として扱う。ただし、算用数字およびアルファベットは1マス2字とする。

＜資料＞

昨今、「幸福」あるいは「ウェルビーイング」というテーマへの関心が高まっている。「GDP(国内総生産)」に代わる「GDW(グロス・ドメスティック・ウェルビーイング)」というコンセプトが唱えられたり、様々な企業が「ウェルビーイング」に注目した展開を進めたりするなど、ビジネスや経済・経営の領域にまで広がっているのが最近の動きの特徴と言えるだろう。

こうした動きの背景にあるのは、GDPのような従来型の経済指標だけでは、現在という時代にそくした「豊かさ」や人々の求めるものは把握できず、それに代わる指標ないしコンセプトが必要になっているという認識である。

私自身は、以前の拙著(『ポスト資本主義』)でも言及したように、これから時代においては「持続可能性(サステナビリティ)」と「幸福(ウェルビーイング)」の二者が、いわば“車の両輪”的な形で中心的な重要性を担っていくと考えている。

つまり、これまでのような「GDPの限らない拡大・成長」を追求するような経済社会のありようが、地球環境や資源の有限性にぶつかる中で、「持続可能性」ということに軸足を置いた姿への転換を余儀なくされると同時に、では「GDPの増加」という従来の目標に代わる「価値」はそもそも何かという問い合わせが浮上し、そうした文脈において「幸福(ウェルビーイング)」というテーマが立ち上がるるのである。

ここではこうした「幸福」ないし「ウェルビーイング」をめぐる近年の動向の意味を、科学との関係を含めて幅広い視点からとらえ返してみたい。

もともとこうした「幸福」ないし「ウェルビーイング」への注目は、すでにある程度知られているように、ヒマラヤ山脈の麓に広がる小国ブータンが1970年代から唱えている「GNH(グロス・ナショナル・ハピネス、国民総幸福量)」に一つのルーツを持つものだった。

時代の流れを確認すると、こうした話題への関心はリーマンショックが起こった2008年頃から新たな局面に入り、たとえば2010年には、フランスのサルコジ大統領(当時)の委託を受け、ノーベル経済学賞を受賞したスティグリツやセンといった著名な経済学者が「GDPに代わる指標」に関する報告書を刊行している。

（参考）世界の幸福度指標開発動向

また、先進諸国の集まりである。OECD(経済協力開発機構)も「Better Life Initiative(よりよい生活に向けたイニシアチブ)」と呼ばれるプロジェクトをスタートさせ、2011年には幸福度指標に関する報告書(“How's Life?: Measuring Well-being”)をまとめ、さらに続編を逐次公刊している。

日本での動きはどうか。日本の場合、内閣府に設置された「幸福度に関する研究会」の報告書が2011年にまとめられているが(私も委員の一人として参加)，実は日本において特徴的なのは、意外にも地方自治体がこうした動きに先駆的に取り組んできていることである。

もっとも先駆的な展開を進めたのは東京都荒川区で、同区は2005年という早い時期に「GAIH(グロス・アラカワ・ハピネス。荒川区民総幸福度)」を提唱するとともに、2009年には区独自のシンクタンク(荒川区自治総合研究所)を設立し、住民の幸福度に関する調査研究や指標づくりに着手し、2012年には6領域、46項目にわたる独自の幸福度指標を策定し公表している。さらに指標づくりだけにとどまらず、並行して「子どもの貧困」、「地域力」といったテーマを順次取り上げ、幸福度に関する研究を具体的な政策にフィードバックさせる試みを行ってきてるのである。

さらに、以上のような展開に共鳴した全国各地の市町村が、「幸せリーグ(住民の幸福実感向上を目指す基礎自治体連合)」というネットワークを発足させ(2013年)，幸福度に関する指標づくりや政策展開について様々な連携を進めている(現在約80の市町村が参加しており、私は顧問の一人)。

ちなみに、都道府県のレベルでも幸福度指標に関する様々な動きが進んでいるが、特に近年、幸福度指標に関する展開を丹念な調査とともに進め、かつそれを政策に具体的につなげる形で展開してきている県として岩手県が挙げられる。同県は2016年から17年にかけて有識者からなる「『岩手の幸福に関する指標』研究会」を設置して検討を行い、独自の幸福度指標を策定すると同時に、さらにその内容を2019年3月に策定された「いわて県民計画」に盛り込んだのである。

以上、この話題をめぐる世界と日本の大きな流れをまず確認したのだが、こうした話をすると、ある意味で当然のことながら、次のような根本的な疑問が浮かんでくるだろう。それは、「幸福は個人によってきわめて多様かつ主観的なものであり、それを数字で指標化することなどできないし、ましてやそれを行政が政策に活用すると

といったことはありえない」という疑問である。

これはごくもつともな疑問で、このテーマだけで一冊の本になるような広がりと深さを持つような話題だが、しかし基本的な論点はある意味でシンプルであり、以下これについてさらに考えてみよう。

ポイントは、幸福をいくつかの重層的な構造からなるものとしてとらえるという点だ。

この点について、図を見ていただきたい。これはいま述べた「幸福の重層構造」を示したもので、まずピラミッドの図の土台のほうは「生命／身体」に関わるような次元である。具体的には日々の十分な食料を得ているとか、身体の健康や安全が保たれているといった基本的なレベルであり、これは人間が生きていくにあたり不可欠のニーズに対応するもので、「幸福の物質的基盤」とも言える。それは「幸福の基礎条件」あるいは「幸福の土台」をなすものであり、しかもこうした次元は個人差を超えて大方共通しており、「人間」にとって普遍的なものと言える。

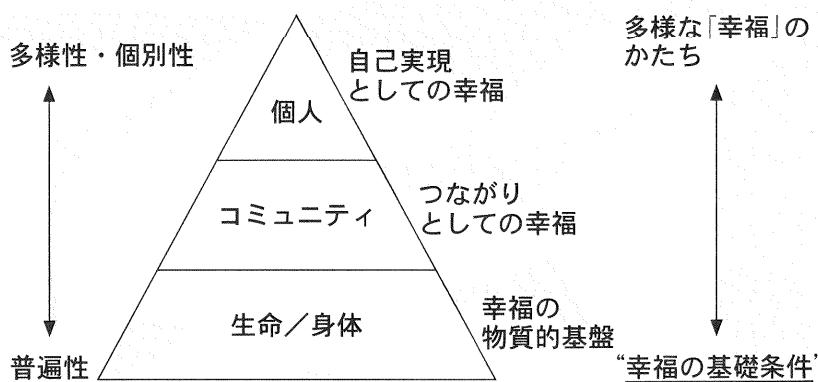


図 幸福の重層構造

以上が主として「個体」レベルに関わるものとすれば、真ん中にあるのは「コミュニティ」あるいは他者とのつながりに関わる次元である。言うまでもなく、人間はコミュニティあるいは社会的関係性の中で生きる存在であり、たとえば狩猟採集の時代を想像すれば見当がつくように、食べ物を得るにしても外敵から身を守るにしても、

人間は“一人では生きていけない”生き物なので、「コミュニティ」を作ることを通じて個体としての「生存」を確実にしようとしたわけである。

もちろんそれは“快適”な面ばかりではなく、そこには「愛憎」や「葛藤」、様々な「しがらみ」「拘束」等々といったネガティブな要素も生まれる。しかしそれらを含めて、コミュニティあるいは他者との関係性から生まれる情緒的安定や帰属意識、「承認」や誇り、自尊心といったものが、人間の「幸福」にとってきわめて重要な位置を占めているのは確かなことだろう。

冒頭で述べた「GDP」との関連で言えば、以上のような「コミュニティ」や「つながり、関係性」に関わることは、実はGDPそのものには含まれていないことに気づく。けれどもこうした側面が、上記のように人間の情緒的安定や精神的な充足に深く関わっており、したがって「幸福」と何らかの関係にあることは確かだから、ここに「GDP」と「幸福」の間に乖離が生じる理由の一つがあるとも言えるのである。

ちなみに、国連の関係組織である「持続可能な発展ソリューション・ネットワーク」が数年前から『世界幸福報告(World Happiness Report)』を毎年公表しているが、その2021年版では日本は56位で、かなり低いポジションにある。この報告書はそれをいくつかの要素に分解して説明しているのだが、日本において特に低い項目の一つに「社会的サポート」があり、これは“困った時に助けてくれる人がいるか”という点に関するものだ。まさにここで論じている「コミュニティ」や「つながり、関係性」に関わる点であり、現在の日本社会の根本にある課題と言えるだろう。

以上、幸福の重層構造ということで、「個体(生命／身体)」のレベル、「コミュニティ」のレベルと見てきたわけだが、最後にピラミッドの一番上の層は「個人」に関わる次元である。これは「自由」や「自己実現」「創造性」といった価値に対応するものだが、ここで重要な点は、想像できるようにこの層に至ると個人の「多様性」ということが前面に出ることである。したがってこの次元に注目すれば、先ほどの幸福指標への「疑問」にも示されていたように、まさに“幸福のかたちは人によって多様”となり、一律の尺度をあてはめることは困難になる。

人生の姿は無限に多様であり、それぞれの人の人生の「幸福」を、一つの物差しで評価できるはずなどないというのは、他でもなくこの次元に対応していると言える。

以上、「幸福の重層構造」ということを指摘し、人間の幸福にはある程度共通的な

“土台”的部分から、個人差の大きいレベルまでの階層的な構造があることを述べた。ではこれは先ほど指摘した、幸福に関する「政策」は可能かという問いや、あるいは幸福をめぐっての「公共政策(政府)」と「民間企業」の役割分担はどうあるべきかといった点とどう関係してくるだろうか。

ある意味で、その答えは以上に述べた「幸福の重層構造」についての説明の中にすでに含まれている。つまり、政府ないし行政が「幸福の公共政策」として重点的に取り組むべきは、他でもなく先ほど「幸福の基礎条件」あるいは「幸福の土台」と呼んだ、ピラミッドの下部の「生命／身体」に関わる領域に関する保障であるだろう。

具体的にはそれは、医療・福祉などの社会保障、人生における“共通のスタートライン”を保障する教育、雇用などに関するセーフティネット等である。実際、先ほど紹介したように幸福度に関する政策をバイオニア的に進めてきた東京都荒川区が、最初に取り組んだテーマも「子どもの貧困」だった。人生における“共通のスタートライン”的の保障とも呼べることであり、それはまさに「幸福の基礎条件」である。

本章の前半で、「幸福政策」という考え方への疑問として、「『幸福』は個人によってきわめて多様かつ『主観的』なものであり、それを数字で指標化することなどできないし、ましてやそれを行政が『政策』に活用するといったことはありえない」という批判があると述べた。しかし以上のような「幸福の基礎条件」ないし「幸福の土台」の領域は、先ほども指摘したように十分に客観的であり、個人の多様性の基盤にある、普遍的な領域と言える。

このように、政府あるいは公共政策がまずもって取り組むべきは「幸福の重層構造」のうちの土台部分であるが、若干の補足をするならば、近年、ピラミッドの真ん中の「コミュニティ」の重要性が様々な面で注目されており——たとえば、高齢者がコミュニティでの様々な関わりを持っていることが心身の健康につながり、ひいては“介護予防”的効果も持っているといった例——、したがってそうした「コミュニティ支援政策」も公共政策として重要な意味を持っていることを付言しておきたい。

(出題にあたっては小見出しを省略し、一部表記を改めた)

問題訂正紙

(経済経営学類)

英語・小論文

注意事項

- 試験開始まで、この問題訂正紙の中を見てはいけません。「解答はじめ。」の指示の後に、訂正の内容を確認しなさい。
- 試験終了後、問題訂正紙は持ち帰りなさい。

問題訂正

小論文 7 ページ 1 行目 下線部を削除

訂正前

また、先進諸国の集まりである。OECD（経済協力開発機構）も「Better Life Initiative（よりよい生活に向けたイニシアチブ）」と呼ばれるプロジェクトをスタートさせ、2011年には幸福度指標に関する報告書（“How's Life?: Measuring Well-being”）をまとめ、さらに続編を逐次公刊している。

訂正後

また、先進諸国の集まりである OECD（経済協力開発機構）も「Better Life Initiative（よりよい生活に向けたイニシアチブ）」と呼ばれるプロジェクトをスタートさせ、2011年には幸福度指標に関する報告書（“How's Life?: Measuring Well-being”）をまとめ、さらに続編を逐次公刊している。

令和6年度入学試験 小論文「出題意図」

(入試情報公開用)

経済経営学類 一般選抜 前期日程

素材として、広井良典『科学と資本主義の未来—<せめぎ合いの時代>を超えて』(東洋経済新報社、2023年) のうち、第2章「なぜいま「幸福」が社会的テーマとなるのか」の一部分（67頁から74頁まで）を与えたうえで、問Iでは資料の要約を求め、問IIでは著者の見解を踏まえた上で解答者の考えがどうなるかを示させ、これらの問を通じて、解答者の読解力、知識活用力、表現力等を総合的に見た。